

原著 (Article)

ベートーヴェンのハ短調作品について

——演奏会を通しての一考察

About Beethoven's C minor :
reflections on the basis of three concert recordings

宮田 俊雄
Toshio Miyata

キーワード：ベートーヴェン，ハ短調，ピアノソナタ，ピアノコンチェルト

Key words : Beethoven, C minor, piano sonata, piano concerto

1. はじめに

ルートヴィッヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）のハ短調で書かれた作品について、これまで行ってきた演奏会での録音を中心に、ベートーヴェンの作風と理念について考えていきたい。25歳で最初の曲を出版したベートーヴェンはハ短調であらゆるジャンルにおいて作曲している。演奏会での収録は、それらのハ短調作品のピアノトリオ作品1-3（1795）、ピアノソナタ「悲愴」作品13（1798）、ピアノコンチェルト 作品37（1800）である。そして、このあと彼の代表作、交響曲第5番「運命」（1808）へとつながっていくのである。

演奏会とは、ある日ある時に舞台上に上がり、そこで聴衆とともに音楽を共有することである。そこに音楽によって時間が作られ、夢のように消えていく。「素晴らしい音楽は必ず、誰かの心に個人的な意味合いを持って響く。シューマンの言葉を借りれば、『心の深奥に光を送る』のだ」（北村，2013）。

「自分の音楽は人の心に火をつける」とベートーヴェンは言った。音楽に希望が託されているからこそ、何度でもまた弾きたいと思うのである。

2. ハ短調について

ベートーヴェンの音楽、ハ短調が意味するものは、闇であると考えられるようになった。ベートーヴェンのハ短調は、交響曲「運命」に代表されるように彼のカラーだと言える。曲は進むにつれ、混沌の闇のなかから終楽章のハ長調へと転じるところに、この曲の最も輝かしいクライマックスが生まれる。第1楽章のハ短調のテーマが反転され、ハ長調で光に満ちて登場するのである。

「運命が戸を叩く」という、クラシック音楽の代名詞のようなこのテーマであるが、

曲の最後まで聴くことにより感動的なメッセージが伝わるのである。古典派の器楽曲では標題がないものがほとんどである。作品番号のあとにト長調などのように調性が示されている。この何調という調性は、第1楽章の始まりの調である。曲のイメージはその調性で決まると言ってもよい。しかし、聞き手にとっては音楽の変化のなかで、相対的な関係が重要なのであって、決してそれを知ることが必要ではない。音楽を作る側は、絶対音感を持っていたとしても、24通りの調性とそれに対応する関係調から音楽的イメージを想像できることの方が重要なのである。よって、何調かを聴き取れるかどうかということ言うのではない。

ハ短調という性格は、モーツアルトから最も影響を受けたことは事実であろう。代表的な曲として、ピアノコンチェルト第24番 K. 491 や、幻想曲 K. 475、管楽セレナード K. 388、ハ短調ミサ k. 427 などが挙げられる。20歳代ですでに聴覚に苦痛を訴えていた彼が最も救いを求めていたものは、自然であった。最後に書いたピアノソナタ作品111（1822）もハ短調である。第2楽章で音楽はより内向的に、そして彼が書いた最も美しいこの変奏曲はハ長調で静かに締めくくられる。「無垢でひたすら自由な魂は、高みへと上りつめ、絶対的な信仰を見出した」。(北村, 2011)

3. ベートーヴェンの第2楽章について

第1楽章が終わると次に第2楽章への新しい展開が待っている。印象は打って変わり、テンポは穏やか、落ち着いた深い息のなかから美しい旋律が現れる。始まった瞬間この変化にこそ、人は安らぎを感じ、癒される。葛藤から解放され、ここに希望があることを示すことこそ、ベートーヴェンの最も伝えたいことであると考えられる。従来、古典の様式ではそれぞれの楽章によって性格が決まっており、全体構成をまとめあげようになっている。第1楽章アレグロ（堂々とした構成のソナタ形式）、第2楽章アダージョ（叙情的で穏やかな歌）、第3楽章（アレグロ 華やかに快活に締めくくるといったようになる）。

ここで最も注目したいことは、ハ短調で書かれた曲のほとんどが第2楽章は変イ長調という調性で書かれていることである。ヴァイオリンソナタ第7番作品31-2（1802）もそうである。この調は、ハ短調とは長3度下に離れた関係にあるが、すでにロマン派を先取りしている点がここにある。のちにシューベルトがピアノソナタ第19番ハ短調（1828）で、やはり大きな影響を受けている。ハイドン、モーツアルトのあとの時代を大きく変えた音楽家として、今日では、古典派とロマン派をひとくくりに、古典ロマン派と言われる所以でもある。

演奏会での録音3曲とも、第2楽章はこの関係調によって音楽の中心部分が作られている。第2楽章は、それ自体だけでも名曲とされるものが多い。音楽に癒しを求める現代社会は、穏やかで美しい2楽章だけを集めたCD「アダージョ・カラヤン」ドイツ・グラムフォン（1995）を大ヒットさせたことがある。現代社会に適合したヒー

リングミュージックとして、クラシック音楽が突然復活したのである。そして演奏会に出かけた時、楽章ごとの展開を追って全曲通して聴くことに意味があることが分る。ベートーヴェンの交響曲「運命」を聴く時、学校の鑑賞においても、そここのところを押さえて音楽全体を聴く楽しみと喜びを味わうことが大切だ。

4. 演奏会記録

4.1 「アルカダッシュ・トリオ演奏会」より

曲目：ピアノ三重奏曲 作品 1-3 ハ短調

第1楽章 Allegro con brio

第2楽章 Andante cantabile con Variazioni

第3楽章 Menuetto

第4楽章 Finale. Prestissimo

演奏者：宮田俊雄（ピアノ）

山口裕之（ヴァイオリン）

北本秀樹（チェロ）

日時：2009 年 1 月 16 日

場所：名古屋・電気文化会館コンサートホールにてライブ録音

曲目解説：ベートーヴェンの最初の出版作品である。作品 1 の 3 曲目に当たるこの曲に対して、師であったハイドンは、曲のロマンティックな内容が聴衆に斬新すぎて理解されにくいと考え、出版に反対したと言われる。しかし、ベートーヴェンはこれこそ自分の自信作であると言って出版に踏み切ったのである。その後、ピアノソナタ、弦楽四重奏、ヴァイオリンソナタ、ピアノ協奏曲のジャンルでハ短調作品を作曲し続け、交響曲「運命」に至っていくのである。

第2楽章は変イ長調で書かれ、テーマと変奏曲形式となっている。各楽器が対等に語り合い、遠慮がちにうなずき合うような親密さにあふれたところが、大変魅力的である。終楽章で曲はハ短調のまま終わるのかと思うと、最後の数小節にピアノに突然現れるハ長調の音階、光が一瞬見えたかと思う間もなく、あっけなくそれは消えていく。「つかむ事のできない柔らかな風のあとに残る思い出のように」（北村，2013）。

4.2 「椋山女学園大学教育学部 卒業生と教員によるコンサート」より

曲目：ベートーヴェン ピアノソナタ「悲愴」 作品 13 ハ短調

第1楽章 Grave Allegro di molto e con brio

第2楽章 Adagio cantabile

第3楽章 Rondo Allegro

演奏者：宮田俊雄（ピアノ）

日時：2012 年 11 月 24 日

場所：名古屋・電気文化会館コンサートホールにてライブ録音

曲目解説：28 歳で書かれ、彼自身により「悲愴」というタイトルが付けられた。第 1 楽章、出だしの重厚な響きを低音部の和音のかたまりで思い切り始めるところが、ベートーヴェンなのである。それは、「こうであるべきか、否か」と自問する弁説のように闊達である。のちに 17 番のピアノソナタについて、ベートーヴェンは「シェイクスピアのテンペストを読め」と言ったのだが、それならば、この悲愴ソナタは「ロミオとジュリエット」ではないかと個人的には想像している。第 2 楽章のアダージョ・カンタービレはベートーヴェンの最も美しい変イ長調の曲である。

「月光ソナタ」の第 2 楽章を、リストは「谷間に咲くゆり」と例えたが、ここでは「バルコニー・シーン」が想像される。第 3 楽章はロンド形式である。過ぎ去りし日々を思い出させるように、回想的に繰り返され、ハ短調のまま曲は閉じられる。悲劇である。

4.3 「梶山女学園創立 105 周年記念演奏会」より

曲目：ピアノコンチェルト第 3 番 作品 37 ハ短調

第 1 楽章 Allegro con brio

第 2 楽章 Largo

第 3 楽章 Molto Allegro

演奏者：宮田俊雄（ピアノ）

河津政實（指揮）

梶山女学園オーケストラ

日時：2010 年 11 月 27 日

場所：三井住友海上しらかわホールにてライブ録音

曲目解説：この頃のベートーヴェンについて北村（2013）は次のように述べている。「1802 年、彼は絶望していた。自立した音楽家になるべく単身ウィーンへやってきて、紆余曲折ありながらもようやく仕事が軌道に乗ってきた最中、数年前からの難聴が本格的に悪化。そんな時期に、ある婦人から『革新的な道を行くピアノソナタを書いてほしい』という委嘱を受け、結果生まれたのが Op. 31 となった 3 つのソナタである。彼自身、この時期にそれまでの自らの作品を否定し始めている事が、友人への手紙からも分かっている。その矢先に舞い込んだ委嘱に、彼は相当夢中になったのではないだろうか」。（北村 2013）

ピアノコンチェルト第 3 番ハ短調も同じくこの頃、ベートーヴェン自身のピアノにより初演されている。最も特徴的であることは、第 2 楽章が非常に印象的にホ長調で始まることである。その和音は荘厳で柔らかい光に満ちていて何度弾いても聴いても

その新鮮さは変わらない。ハ短調から下がる 3 度でなく、上がる 3 度の方の調性である。これも自然の神秘から直感的に得たインスピレーションであるに違いない。第 3 楽章の中間部には変イ長調のテーマが、「待ってました」と言わんばかりにとても魅力的に現れる。ここでは、やほりのどかで平和な牧歌が歌われる。「きっとベートーヴェンは最初にこのテーマを思いついてから、全体的な構想をまとめたのではないかと思えるくらいである」(池辺, 2008)。

5. 終わりに

完全な静寂のなかに何か得体の知れない、耳を圧するような「闇」という音がある。シューマンが自作の最晩年の小品集(暁の歌 1854)について「朝が近づいてくる時の感覚を音楽的に表現したものだが、情景描写というよりも心情の表現といった感じだ」、と言っている。ベートーヴェンも、6 番目の交響曲「田園」に対して似たような解説をしている。(北村, 2013)

若いベートーヴェンが最初の曲を出版した時から、残した作品を通して、彼の革新的に歩いてきた道のりを見ることができる。ハ短調という性格を持った心情の表現をベートーヴェンは生涯、こだわりをもって追求した。苦悩から勝利へという理念は、ハ短調からハ長調への変容のドラマである。最初の作品 1 のピアノトリオの終結に、すでにその展開を書いているのだが、夢のようにそれは消えている。それは何を予感させるものであったのか、師ハイドンも想像できなかったにちがいない。最後の交響曲第 9 番「合唱付き」に描かれたように、長大なアダージョの闇を経て、夜明け前の静寂さから湧き上ってくるものは希望に満ち溢れた歓喜の歌となる。それは感動的にすべての人に向かって放たれる壮大なメッセージとなった。

■参考資料

- 池部晋一郎 (2008) 『ベートーヴェンの音符たち』, 音楽の友社出版
- 北村朋幹 (2011) 「めぐろバーシモン未来の音シリーズ」プログラムノート, 2011 年 11 月 5 日開催
- 北村朋幹 (2013) 「トッパンホールアンサンブル」プログラムノート, 東京トッパンホール, 2013 年 1 月 16 日開催
- 宮田俊雄 (2012) 「椋山女学園大学教育学部 卒業生と教員による演奏会」プログラムノート, 名古屋・電気文化会館, 2012 年 11 月 24 日開催